

ベラルーシ国立大学と奈良大学における バーチャル型リアルタイム交流の実践と課題

—— 大学生の国際交流授業の提案 ——

河崎 絵美・山岡 洋輔

1. はじめに

文部科学省が2012年に開始した「グローバル人材育成推進事業」によって、留学や語学研修といった機会は各段に増した。これにより、学生にとって海外はそれまで以上に身近なものとなったに違いない。とはいえ、経済的な理由や家庭の事情等により、その機会を断念せざるを得ない学生もいるのが現状である。

近年では、世界中の教育者の注目がICTを利用して海外と繋がり、実際の留学体験で培うべき学びを得ることができる教育実践に向かい始めている。それにより、国境を越えた新たな学習者同士の学びをバーチャル型で行う教育実践が展開されるようになってきた。

本研究では、バーチャル型リアルタイム交流を実施し、国境を越えた協働学習の可能性について提案する。

2. 研究目的

バーチャル空間とはいえ、リアルタイムで実施することで、より現実に即した国際交流の実現が可能だと考える。日本語母語話者である大学生と海外の日本語学習者との「オンライン日本語交流会」が、参加者のステレオタイプの外国人像を払拭し、異文化に対する探求心を深めることが明らかとなっている(河崎 2020)。実際に現地へ赴き、対面で交流した場合とICTを活用したいいわゆるバーチャル型交流との比較をした先行研究は、筆者の知る限り見当たらなかったが、バーチャル型による国際交流が国際理解に繋がる可能性は十分にあると考える。バーチャル型国際交流に期待される効果としては、これまで外国人と接することがなかった学生や海外や語学に興味や関心が低かった学生にとって、よりコミュニケーションに対する動機が高まる点ではないかと推測す

る。また、海外で日本語を学んでいる日本語学習者にとっては目標言語である日本人大学生と日本語で交流することにより、更なる学習動機へ結びつけることが可能ではないかと推測する。特に現地で教師以外の日本人と交流する機会がほとんどないような国の学習者にとっては一生懸命学んで身に付けた日本語を披露する場は極めて限定的といった状況にある。ベラルーシもそういった国の一つである。調査対象となったベラルーシ国立大学の学生たちにとって日本人大学生とのバーチャル型リアルタイム交流は日本語を披露する絶好の機会となり、その機会自体を増やす新しい試みとなることが期待できる。

本活動の目的は、海外留学体験を通してグローバル人材を育成するというような目標ではなく、多様なニーズと多様性を持つ学生たちに、より幅広く、可能な限り一定の国際的な学びの体験を提供することで視野を広げ、学習動機を高めさせることにある。

3. 調査概要

3-1. 調査対象者

ベラルーシ国立大学 国際関係学部 日本語・日本研究コース（3年生5人）
その他のベラルーシ人参加者2人（後述）
奈良大学 文学部 国文学科（日本人大学生8人、留学生1人）

3-2. 調査日時

第1回交流会：2022年5月6日 午後13：00-14：30（日本時間）
午前7：00-8：30（ベラルーシ時間）
第2回交流会：2022年7月15日 午後13：00-14：30（日本時間）
午前7：00-8：30（ベラルーシ時間）

3-3. 調査方法（手続き）

奈良大学の学生に対しては、グループの代表者に個人が所有するパソコン、あるいは携帯電話から交流会に出席することを義務付けた。ベラルーシ国立大学の学生には、個人が所有するパソコン、あるいは携帯電話から交流会に出席することを義務付けた。

交流には双方の大学が推奨する「Zoom」を利用することとした。交流後は、自由に感想をまとめ、提出することを授業内課題として提示した。学生が提出した感想文と授業中の様子を観察し、記録したものを教師の所見から分析する。

4. 「バーチャル型リアルタイム交流授業」の実施

本活動は時差と各大学の定期試験や夏休みを考慮し、1度きりの交流授業として計画していた。しかし、1回目の交流終了後、特に奈良大学の学生たちから「楽しかった」「もっと話したい」「第2回目も開催してほしい」「このような交流授業をもっと体験したい」という強い希望が、何とも言い難い笑顔と、強い意志を感じる程の勢いのある態度で教師に伝えにきた。学生たちが授業について積極的に自分の意見を、それも直接教師に伝えるという行為は、通常の授業ではそれほど多くないことである。そういった経緯をベラルーシ国立大学へ伝え、2回目の開催が実現したことをここに記すこととする。

奈良大学の学生たちは、1回目の交流時にベラルーシ国立大学の学生たちと大学での専攻や分野が同じであることや、好きな作家や文学作品の話題から国境を超えた、初めての「共感」を体験した様子であった。同じ趣味嗜好であるということを知るだけで、一気に親近感が湧いたと考えられる。その一方で、自分たちの想像を超えた日本に対する質問に戸惑い、違和感を抱いたようである。日本人なのに日本を知らないということに衝撃を受け、それに葛藤しているようにも見受けられた。そのため、学生たちに日本人として、あるいは日本で暮らす者として、世界に「日本」を発信するためには、どのようなテーマがふさわしいのか、自分が伝えたい日本について考えるよう助言をした。それに対し学生たちは、もっと日本のいろいろな事を伝えたいと、それぞれが色々なテーマを準備してきた。学生たちが準備したテーマは主に日本文化に関するものであったため、2回目の交流では日本の文化をテーマとして意見交換する活動を設定することとなった。

4-1. 第1回：活動目標「ディスカッションによる合意形成」

本活動では、同世代の大学生同士がディスカッションを通してお互いを知り、理解を深めることが目的である。また、国境を越えた異文化理解のための授業がバーチャル型の交流であっても、学生たちの新たな学びとなり得るのかも課題となる。

ベラルーシ国立大学の3年生後期(2022年2～6月)の「会話」授業の目標は「日本語で相手の意見を理解し、それを受けた自分の意見を過不足なく表現する」というものである。交流授業当日までに、邦人教師とのディベートや学生間ディスカッション等、様々な場面で自分の意見を表現する練習を積んできた。今回の交流授業は、その集大成として位置づけ、日本人大学生と日本語で

ディスカッションを行う中で、自分の意見をどれだけ表現し、コンセンサスを得られるかという日本語学習の点における目標も設定している。

第1回目の学生たちの参加状況については、ベラルーシ国立大学では、時差の関係から通常授業とは異なる時間帯となってしまったが、一回分の通常授業をこの日に振り替えたため、3年生の5人全員が出席した。奈良大学では、通常授業時間での開催であったことから全員出席であった。

4-1-1. 事前指導

第1回目の交流授業では、日本のテレビ番組で扱われていた「裁判」を教師がアレンジして教材化したものを用いた。

ベラルーシ国立大学では、交流授業当日までの事前指導として、通常授業内で日本の裁判員裁判制度について学び、いくつかの事例について考えを深めた。そして、実際に裁判員になり切ってディスカッションを行うという事前活動を行い、ディスカッションでよく使う語彙や表現を導入した。また、今回の使用教材である「離婚裁判」の本文を読み、離婚したい4組の夫婦の内、どの組が確実に離婚できるかという視点から、自分なりの意見を考えるという課題を授業後課題、つまり宿題として課し、交流授業当日に臨ませた。

一方の奈良大学では、交流授業開始直前まで「離婚裁判」の本文を読まなかった。これは、日本語能力や内容理解に事前に時間をとる必要がなく、また、事前に内容を知らないほうが先入観のないその場での率直な考えを聞けると判断したためである。実際、Zoom入室の10分前に本文を読ませたが、内容理解に対する問題はなかった。奈良大学には留学生の在籍数が少なく、普段の学生生活で留学生と接する機会は非常に少ない。また、通常授業時に学生へ聞き取りを行った結果、海外に対する興味や関心、外国人との積極的な関わりが非常に少ないことに衝撃を受けた。その結果を受け、交流授業までにベラルーシの主要産業、観光名所や食べ物、ベラルーシ国立大学について事前調査をし、できる限りの情報を得るよう課題を提示した。交流授業時には、全員がある程度の国理解ができていることを目指し、そのための活動指示を出した。

4-1-2. 活動の記録

Zoom上での、顔合わせはお互いにとっても緊張した様子であった。参加者全員の表情が硬く、最初の一言を切り出すには、教師の働きかけが必要であった。

交流授業では、教師がブレイクアウトルームを作成し、学生たちは指定されたルームへ移動したところから活動が開始される。各グループへ移動後、簡単

な自己紹介をした上で本時の学習活動を開始するよう学生たちに指示を出した。

自己紹介では、奈良大学の学生は国文学科であるため、ベラルーシの学生から日本の文学作品や作家についての話題が出る度に驚きと喜びを体全体で表現していたのが印象的であった。また「香道」について研究していると自己紹介をしたベラルーシの学生に対して、日本人学生が「香道」について知らなかったり分からなかったりする場面では、日本人なのに日本の文化を知らない、分からないこともあるのかといった発見と衝撃を受けた様子であった。

自己紹介終了後は、少し打ち解けた様子が見られた。本時の活動である離婚裁判の判決決めでは、どのグループも最初に一番離婚できる事例はどれなのかを決めるための意見を出し合っていた。自分の意見と異なる意見が出た際には、なぜそうなのかという理由について話し、お互いに納得するまで意見交換が続いていた。ベラルーシ国立大学の学生が、言いたいことを整理したり言葉を選んだりしている間、奈良大学の学生たちは笑顔で待つ者、言葉を必死に選ばうとするベラルーシ国立大学の学生の心境に共感し、共に困惑した表情を浮かべる者がいたことは、相手を尊重する態度、日本語学習者に対する配慮を感じる瞬間でもあった。

4-2. 第2回：活動目標「日本文化を知ろう」

本活動は、動画視聴後にリアルタイムで交流を行うこととした。事前に奈良大学の学生が各グループで日本文化や日本事情に関するテーマを設定し、それについて各グループがプレゼンテーション動画を撮影した。動画は「導入」部分のみとし、リアルタイム交流時に多くの時間に詳細説明をしたり、動画を視聴したベラルーシ国立大学の学生たちからの質問に答えたりする「活動」にあてられるように工夫をした。ベラルーシ国立大学の学生には、第2回目交流会までに各自動画を確認しておくことを義務付けた。

第2回目の交流会の学生たちの参加状況については、ベラルーシ国立大学は既に夏休みに入っていたこともあり、任意参加とした結果、大学からの参加者は3人に留まった。

奈良大学は通常授業時間であったため、1回目同様、2回目も全員出席であった。

4-2-1. 活動の記録

ベラルーシ国立大学は既に夏休みに入っていたため、第2回の交流授業は任

意の自由参加とした。時差の都合で早朝となってしまう時間帯が響いたのか参加表明したのは3人に留まった。1ヶ月前に奈良大学の学生たちが準備した動画を大学で使っているクラスのSNSグループに送り、それを見て質問や感想を考えておくように指示をした。ただ、第1回目の時のように授業内で準備することができなかったため、1週間前に教師が作成したpadletのページを共有して質問内容をメモするように指示した。今回の交流会は動画を見るという前提条件があったため、きちんと動画を見たかどうかの確認の意味合いもあった。しかし、2日前になっても誰も何も記入しなかったため、焦りを感じた教師が催促すると、前日になって3人も急用で参加が難しくなったという返事であった。個別に連絡を取り、何とか参加してもらおうと説得を試みると同時に全員が不参加だった場合を考え、ベラルーシ日本語教師会のSNSに日本の大学生と交流したい学生の緊急募集の告知を出した。本番では説得が奏功したのか予定通りベラルーシ国立大学の3人が参加したほか、ミンスク国立言語大学の4年生1人、プライベートで日本語を勉強している高校生1人の5人が参加することになった。

交流当日は2回目の交流とあって、1回目のような緊張感はなかった。皆、笑顔であることが印象的であった。当日は奈良大学の発表グループをブレイクアウトルームに分け、ベラルーシの学生を各ブレイクアウトルームへ割り振り、時間を区切って次のルームへ移動するよう教師側でコントロールを行う形で交流を実施した。事前に動画を確認してくれていたベラルーシの学生たちからは動画に対する質問を受け、それに奈良大学の学生が答えるという形で活動に取り組んでいたが、どのグループも思うように進まなかったようである。特に「日本の神様」をテーマにしたグループは、自分たちが準備していた内容が思った以上に伝わらなかったようである。

このグループは日本の神様について紹介し、自分の国の神様について比較等をしながら話を展開した上で、自分なりの神様、つまり空想の神様をつくることを最終目標としていた。神様に対して理解しやすいよう、ジブリ作品を介して紹介するなど親しみやすさに配慮や工夫をしていたが、想定通りにはいかず、説明に時間がかかりすぎて焦っている様子が伺えた。学生のコメントを見ると「千と千尋を提案したが、そもそも複雑な日本の宗教観を短く分かり易く説明するのが大変だった。」「神様を題材にするのは難しかったと思った。考えてもらうより実際の神様（できれば衣食住の）の画像を探してきて名前と一緒に紹介してどういう神様かを考えてもらう方が良かったのではないかと思った。」「オリジナルの神様を描いてもらうという内容でしたがやっぱり難しかったみ

たいでなかなかうまくいかなかった」「テーマ自体はそのままでもよかったと思いますが、交流当日では千と千尋に興味を持った人が多かったのもう少し深掘りしたらもっと興味を持ってもらえたかなと思いました。」「交流当日では予定していたおりに進むとしか考えておらず、向こうの人に難しいと言われた時のことを考えていなかったのも、そういったもしもの場合も考えることができなければ良かったと思います。」といった反省点や改善点に関するコメントばかりであった。しかし、ベラルーシ国立大学の学生コメントには、神様グループが一番よかったというものもあった。熱心に説明をしたことに対して好意を感じているといった内容のコメントがあったことは、今回の一番のテーマである国境を超えた相互理解へと学びが発展したことを示唆している。

5. 考察

5-1. 第1回

ベラルーシ国立大学の学生たちにとっては学んだ日本語をネイティブの前で披露する機会が極めて少ないため、当日の交流会をととても楽しみにしていた。交流テーマの課題はもちろん、自己紹介や大学の紹介もスライドを準備して学生どうしで練習するなど彼らにとって万事を尽くして本番を迎えた。一部、スライドがうまく動かなかったり、発言中に止まってしまったりする通信トラブルはあったが、交流会後に全員が「日本語で言いたいことが言えた」と感想を話しており、ベラルーシ国立大学の学生たちにとっては大満足だったようである。

奈良大学の学生にとって、初めて交流する国の学生であったことから交流準備の段階から、興味を持ってベラルーシの国について基本情報等を調べていたのは印象的であった。交流開始時、相手の日本語能力を探る様子と、自分の日本語を強く意識して話す姿勢は、多文化共生社会を生きる上で、非常に重要な点であることに気付くよききっかけとなったのではないかと推測する。また、国は違っていても専攻している分野が同じであったことは、奈良大学の学生にとって、親近感を抱く最初のきっかけとなっていた。好きな作家や作品について会話が盛り上がっているグループや、サブカルチャーの話から好きなアニメで意気投合するグループ、一方で伝統的な日本の文化や習慣であっても、特定の層しか知らないようないわゆる「日本人が知らない日本」について意見を出された時には、不安そうな表情になり、焦りを感じさせる場面も見受けられた。異国である日本の文化を学んでいる外国人から見ると、日本人は日本のことを

全て知っていて当然と考えるのは自然な流れである。「日本人が知らない日本」を外国人が知っているということがわかり、よい経験となったに違いない。

本交流は、ベラルーシ国立大学の学生の日本語学習という側面もあったため、日本語のみで行ったが、どのグループも問題なく楽しく活動を終えることができたことから活動の目的を達成できたものとする。

5-2. 第2回

第1回終了後にはベラルーシ国立大学の学生全員が「2回目があったら、絶対に参加します」と言っていたのだが、日程調整が難航し、ベラルーシ国立大学の夏休み期間中になってしまった。そのため、任意参加としたところ、3人が参加を表明した。しかし、前述のように前日になって3人とも欠席の連絡をしてきた。もちろん休みに入り、実際に様々な予定が入ったということもあったのだろうが、説得の結果、全員が翻意して参加した。ここには「オンラインの弊害」があるように感じた。オンライン交流会は対面とは違い、実際に会うわけではなく、自宅からPCやタブレットをインターネットにつなぐだけである。この気軽さが「長期休暇中の任意参加」という状況で逆の方向に作用し、「ドタキャンしてもいいかな」という心理を生み出してしまったのではないだろうか。交流会を終えての3人の感想は第1回のとくち変わらず、高評価だった。それどころか「キャンセルしなくてよかったです」と言う学生もいた。日程調整とともに任意参加とはいえ、何らかの課題を与えるなど「オンラインの気軽さ」を悪い方向に向けさせないための工夫が必要だと痛感した。

奈良大学の学生たちは、1回目の交流が非常に有意義であったという言葉通り、今回の活動は準備段階から盛り上がっていた。交流の内容については、相手の興味や理解度をあらゆる角度から議論し、時間をかけて準備していたことが印象的である。今回の参加者は皆、日本語教育について学んだ経験がなく普段の生活でも外国人と接することは非常にまれであることが明らかであった。そのため、自分の話す日本語について相手が理解できるよう工夫することは、大変な作業であったはずである。

交流後、準備していた内容がうまくできなかった点や改善点について学生同士で話し合う姿が見受けられた。学生達が積極的にフィードバックできる雰囲気は交流直後にあったことは教師にとっても驚きであった。話し方や扱う内容について、何がどう不足だったのかを話す姿は、失敗や反省について話しているにも関わらず、どこか「満足」や「達成感」が感じられた。これは教師にとっては意外なことであった。しかし、この意外性は授業運営という点からすると、

非常に高く評価できていると考える。なぜなら、授業で扱った今回の活動が「授業」という枠を超えて学生たちの学びに繋がった結果だと思われるからである。

5-3. 総括

ベラルーシ国立大学の学生たちにとって今回の交流会は同世代の母語話者とのリアルタイム交流という点で、とても有意義であった。ベラルーシには在留邦人が少なく、日本語母語話者とコミュニケーションできる機会は限られる。ましてや同世代の大学生とのリアルタイム交流はこのようにバーチャル技術に頼らなければまずできない。そのため、通常授業で学んだことをそのまま生かすことができた第1回目の交流は言うに及ばず、同世代の大学生から日本文化のレクチャーを受け、意見交換をした第2回目の交流も彼らには非常に貴重な機会であったことだろう。また、リアルタイムで実施したことで、言葉の使い方や間の取り方、表情などを駆使してコミュニケーションを成立させる術を同世代の日本語母語話者から学び、体感できたことも大きかった。このように日本語の「会話」に触れる機会が少ないベラルーシ国立大学の学生たちにとって今回の交流は彼らの学習意欲の維持や促進という観点から非常に効果が高かったと結論づけることができるだろう。

他方、奈良大学の学生たちにとって今回の交流会は「当たり前」が通用しない、初めての経験となった。この初めての経験は、日本や日本語を客観的に見て捉える力を育成し、世界の中の日本を見る目を養う第一歩に繋がった。それを裏付けるのが、第1回目の交流時に体験した「日本人の知らない日本」を知った瞬間である。これまで何気なく、それこそ当たり前のこととしてやり過ごしていた「日本」について、大学での専攻が同じである同世代の外国人に質問された時の衝撃や葛藤は、日本文化をもっと知る必要があるという自分の専攻への学習意欲につながった。その結果、第2回目の交流では自分たちの知っている日本について多角的に捉えるよう努めていた。自分たちから第2回目の交流を希望しただけあり、事前準備ではグループ内での積極的な意見交換が行われていた。学生たちの意見には、外国人の視点から考えるという作業が自然に加わっていた。これは、社会や文化的マイノリティに対しての相互理解という観点から、非常に効果が高かったと結論づけることができるであろう。

6. 今後の課題

今後の課題として、まず挙げられるのは時差の問題である。授業を超えた時

間外で学生の参加を募ることは、様々な制約から困難である。この点については、学科、学部など組織間での話し合いが解決に導く一つの方法であるのではないかと考える。

今回の活動は、教師側が設定したテーマで交流を行ったため、準備段階では教員側の指導が必須であった。そのため、ある程度コントロールされた中での交流という雰囲気を感じる。今後、教師はファシリテーターに徹し、参加者である学生たち自身がテーマを考えるなど、積極性を尊重した「協働学習」が展開できるようしていくことが、更なるバーチャル型リアルタイム交流の可能性を広げるものとなるだろう。

参考資料 ※一部抜粋、変更

【奈良大学学生コメント】

Aさん

今回の交流会では、普段の日常では体験できない貴重な時間だったと考える。交流会の中では気づきがあった。相手からの質問で「香道」は日本ではメジャーなのか、と言う質問があった。自分は香道について名前すら聞いたことがなかった。書道や花道のほうがメジャーであるため聞くのが初めてだった。自分達より交流の生徒たちのほうが日本に詳しいのではないかと考えた。

Bさん

話し合いの時間で、Xさんがたくさん話してくれたなかで自分達との会話がとてもスムーズにできてびっくりしたけど、とても楽しくグループセッションできました。自分達の伝えたいこともちゃんと伝わって、相手の言いたいこともすごく分かりやすくスムーズに会話できた印象を受けました。最後のフリートークでも、Sさんの好きなものや趣味をたくさん聞いて、Wくんの好きなゲームがベラルーシでも流行ってるという流れで盛り上がってあっという間の時間でもっと話したいと思う時間でした。ベラルーシの方に是非日本に遊びにきて欲しいと思ったし、機会があれば一緒に観光したいと思うくらいとても楽しかったです。

Cさん

私は今回の交流会で感じたことが3つある。1つ目は、日本語学習者の日本語の上手さに驚いた。私は高校・大学でも英語の勉強をしているが実際に外国に行ったことがないので自分の外国語がどこまで通用するのかわからない。だが、自分の外国語を話す能力よりも、今回交流したベラルーシの方々の日本語の対応力の高さのほうが上だと感じた。画面越し、マスクをした状態であり顔の表情が見えない中、こちらが話したことをしっかりと聞き取り受け答えしているのがとてもすごいと思った。

2つ目は、ボディランゲージを使うと反応が良かったことである。自分が自己紹介で、

「ラーメンを一日に3杯食べることがある」と説明する際、「3」を手で表しながら説明した。すると、ベラルーシの方々には私が話したことがわかったのか、笑うなどの反応を見せてくれた。また、司会をする際にもボディランゲージを使用すると、反応がとてもよかった。マスクをしているので顔の表情が読み取りにくい中、ボディランゲージを使用することで日本語学習者によりわかりやすく日本語を伝えることができるのではないかと感じた。

3つ目は、日本語学習者は日本についてすごく物知りだということだ。交流会をした人の中で「こうどう」について質問をしてくれた人がいた。私はその時何かわからなかったが調べてみると「香道」ということがわかった。ほかにも「鬼滅の刃」など日本のアニメについても話している人がいた。日本のアニメが海外でも有名だということはメディアを通して知ることができるが、日本の文化はどこまで知っているかわからなかった。我々日本人があまり知らないことに対して海外の人は魅力を感じるのだと気付いた。海外の人に日本の文化について教えてもらう、というあまり感じるができないことが今回体験できた。

海外の日本語学習者は、日本のさまざまなことに関して興味・関心を持っていることがわかった。他にも海外の方と交流する機会があればまたしてみたいし、私が知らない日本についてもっと知りたいと感じた。

Dさん

まずベラルーシの皆さんの日本語が非常に上手で驚いた。離婚できる可能性が最も高いのは誰になるかというテーマで話し合う機会があったが、相手のチムールさんは自分の境遇や、その他の選択肢も加味しながら建設的に考えて、それをしっかり日本語に変換して話していたため、特にそう思った。中でも最も印象に残ったのは「離婚できる可能性が高いこと」と「悪いこと」とを区別して考えているところである。パチプロの場合、ギャンブルにかかるお金は莫大であり、家族が買いたいものに使うお金も、最後には家さえも売ってのめり込んでしまうため、その夫婦が最も離婚できる可能性が高いと話していた。隠し子がいたことは、その隠し子が幸せにならないと話し、「悪いこと」とであると話していた。チムールさんは、父親のことを「親父」と呼んだり、ベラルーシでは女性の方が学歴を詐称していると言ったり、ユーモアのある方で、話していて非常に楽しかった。

フリータイムではエカテリーナさんと交流したが、自己紹介の時にアニメや漫画、料理等の日本文化に触れていると聞いていたので、アニメについて話したり、追加でゲームも好きであると聞いたので、ゲームについても話したりした。アニメの時には日本の有名なアニメの中でも「鬼滅の刃」が好きだと聞き、「煉獄さんが旦那さん」と話していてその好感度がよくわかった。ゲームでは特に Nintendo Switch のゲーム、ゼルダやマリオなどの話を聞き、日本で作られたゲームが海外でも人気であることを身近に感じることができた。

今回の交流会を通じ、外国人と交流することの楽しさがよくわかった。同時に、今方言を話していなかったかの自分の話し方や、言葉のチョイスなどに気を使って話すこと

の難しさを実感した。恐らく気付いていないところで訛っていたと思うので反省している。ペラルーシの皆さんは本当に日本文化に興味津々で、コロナ禍が終わればぜひ日本に来て、文化に触れて楽しんでほしいと思った。

【ペラルーシ国立大学学生コメント】

(一部、誤った表現や読みづらい表現があるが、本人の感性を尊重して日本語で提出された感想を訂正することなく記載している。)

Aさん

日本語勉強の時、日本語の文法や語彙を学ぶことはもちろん重要なのですが、会話練習がないと大変です。日本に行けない人にとって交流会は本当に役に立つと思います。

交流会のおかげで、日本人と話すチャンスだけでなく、日本の日常生活について少し学んだり、ペラルーシの文化について教えたりする機会もありました。

ディスカッション以外に、日本語でゲームやアニメの話をしました。私はロシア語でも初めて話すのが下手なのですが、日本語は難しかったです、楽しかったです。だから交流会は役に立つばかりでなく、とてもおもしろかったです。

私は交流会の前に少し緊張しましたが、交流会の雰囲気は良かったです、落ち着いて、交流会を楽しめました。

Bさん

交流会は最後まで全部はよかったです。とても嬉しい経験です。私にとって、神様のトピックが一番面白くて、楽しかったです。分かりにくい所もありましたのに、みんなはすごく元気で、好意を思いました。たくさん教えてありがとうございます。

Cさん

日本語と日本文化を専攻している学生として私たちはいつも日本人との会話する機会を探しています。ですから、奈良大学の学生たちとの交流会を本当に楽しみにしていました。

交流会の時はいろいろな話題について話せました。例えば、日本の季節に関することわざ、日本の神様、日本の記念日などです。会話を通じて日本語だけでなく、日本の伝統文化と現代的な文化に関する話もしました。奈良大学の学生たちはみんなやさしい日本語をつかったりわかりやすい言葉でトピックのことを説明してくれたりしました。ペラルーシ国立大学の学生たちはみんな交流会に参加できて本当に嬉しいです。